



公開セミナー記録

『セミナー断章』

2011年11月

講義：藤田博史（精神分析医）

セミナー断章 2011年11月12日講義より

思想と不易流行

聴講者 近年、現代思想の「カンタン化」ということを述べていた人がいました（註1）が、最近、圧倒的な思想がなくなっているように思います。

藤田 一部のインテリがしっかりやっているうちはよかったです、インテリ層が馬鹿になってしまっているから。昔よく一億総白痴化とか言っていましたが・・・。

―――本当にそうってしまったのかもしれない。

若い人たちがどんどん深みに嵌っていきけるような指導者がいないというか。

―――小熊英二が、戦後の思想を三つの世代に分けて、一つの世代が1945年前後、次の世代が50年代後半から60年代前半位まで。そして三つ目なのですが、「東浩紀さんや北田暁大さんが71年生まれですが」と言及しておきながら、実際には75年以降の世代に注目しています。そして45年前後生まれの人たちが貧しい時代から急激に豊かな時代へ青春を過ごした一方、この三つ目の世代は、豊かな時代に生まれたと思っていたら、青春に不況に直面するという時代を過ごしたと指摘しています。そのことを確認したうえで、新しい思想の潮流は、この不況の時代が当たり前となった80年代後半から90年代の世代から出て来るのではないかと予想を立てていますね（註2）。

ハングリー精神と言いますが、人間の思考力や素晴らしいひらめきは満腹の時ではなく、空腹の時に出てくるということがありますよね。そういう意味でいうと45年頃生まれの全共闘世代というのはハングリーな時代を生きてきて、その残り火のなかをわれわれ1950年代の人間が歩いて、全部鎮火してしまって、きれいに舗装され、そこへ70年代の人たちが出てきた。だから70年代の人たちにしてみれば、切羽詰まった思想ではないから、思想自体がカタログ化できる。いい意味でいえば客観視できる。自分の内側から出てきたニーズではなくて、客観視としての思想だから、いわゆるデバイス、道具なのですよね。全共闘世代からギリギリ僕らぐらいの世代は「必然」というかね、そうせざるを得なくて思考をさせられてきた世代なのだけれども、それ以降はカタログ的な、教科書的な水準なのですね。

―――しかし今はそういう、閉塞的だけれども豊かな時代が、過ぎ去りつつあって、迷っている若い人が多いと思うのですよね。何か求めているのだけれども、たとえば東浩紀的な言説が、急速に失効しているという感じが如実にするのです。

やはり流行りでした。よく言われることですが、松尾芭蕉の「不易流行」、「普遍的なもの」と「移りゆくもの」。その「移りゆくもの」の流れの上に思想が乗っかっているから、すぐ笹の小舟のように・・・笹舟作って川に

上の写真は、フランス・ニースの城跡にある石畳である。そこにはフランス語で HEUREUX QUI COMME ULYSSE FAIT UN BON VOYAGE（幸いなるかな、ユリシーズのようによき旅をしたものは）と書かれている。

註1 仲正昌樹『集中講義!日本の現代思想 ―ポストモダンとは何だったのか』(NHKブックス)、日本放送協会出版、2006年

註2 小熊英二「『ポスト戦後の思想』はいかに可能か?」『私たちはいまだどこにいるのか』、毎日新聞社、2011年
「日本の言論界や思想家を見渡してみると、現在活躍している人たちに三つの世代があるように思います。

一つはいわゆる団塊の世代、ベビーブーマーです。上野千鶴子さんや加藤典洋さん、少し下の世代だと、内田樹さんとか姜尚中さんとかがいっぱいいますね。

二つ目が、1957～60年頃に生まれた人々たちです。浅田彰さん、大澤真幸さん、宮台真司さん、吉見俊哉さん、大塚英志さん、香山リカさん、三浦展さん、山口二郎さん、杉田敦さんなどがそうですね。少し下だと、宮崎哲弥さんが62年生まれで、私の同じ年の生まれです。

もう一つの塊がどこにあるかという

流した経験のある人はわかるけど・・・下までいかないですよ、途中でひっかかってもうそこで流れていかないでしょう。

精神分析は、当然、流行も見られるけれど、そのなかに不易なものを見出す一つの思考法だから、不易なものに対して指向性がない目先の思考ではない。「不易流行」という考え方がありますよね。以前から言っていることですが、われわれ人間が生きていて、重要なことは、三つしかないとわたしは思っているのです。何かというと、これ（ホワイトボードを指す）、わかりますか。

L・E・Aの三つです。Lは、Logic フランス語ではLogique、EはEthics (Ethique)、AはAesthetics (Esthetique)、要はこの三つです。(図1) 論理、倫理、美(学)。不易なものの中にも、そして流行の中にも、それぞれロジック、エティック、エステティックがある。

ここに臨床的な考え方を取り込むと面白いのですが、病気は精神病でも身体の病気でもそうですが、たとえばリューマチにかかっている人がずっとかかっている、あるいは喘息の人がずっとかかっている、そういうのを「慢性」といいます。「慢性」の腰痛とか、そうですね。

それとは逆に、すごく重いものを一生懸命持とうとしたら、いきなりぎっくり腰になってしまって立ち上がれないとか、急に何かが起こる。それを「急性」といいます。

慢性疾患か急性疾患かを、瞬時に見分けることは、特に救命救急医にとって大変重要です。また慢性疾患か急性疾患かで、治療の仕方が真逆になることがある。たとえば腰痛、昔から腰痛持ちの人っていますよね。そういう人は、その患部を「暖めなければいけない」。急に腰痛が起こってきた時、たとえば今のぎっくり腰みたいに、そういう場合は、患部を「冷さなければいけない」。だから同じ症状に対しても、それが慢性なのか急性なのかで、対応の仕方が違ってきます。

人間の思考様式にそれを当てはめるとしたら、それが「不易流行」。つまり不易というのは「慢性」、流行は「急性」。慢性はフランス語でchronique、英語でchronicといいます。急性はフランス語でaigu,英語はacute といいます。

人間の思想が一つの病気だとしたら、それが慢性疾患なのか、急性疾患なのか。そうすると東浩紀とか出てきても、あれは人間の抱えている急性症状なのですよ。急性疾患だから派手な症状を出すから、皆、大変だとか言いますが、じわじわと人の思想の中に進行していく慢性なものというのは、流行的なものではない。

ところがね。こういうのもあるのですよ。慢性肝炎という病気がありますね。A型肝炎、B型肝炎どちらも慢性化する可能性があります。慢性肝炎が時に急性化する時があるのです。そういうのを劇症肝炎といいます。死んでしまう。

だから思考の一つのパターンとして、この二つの座標軸、不易なのか流行なのか、そして論理(ロジック)なのか倫理(エティック)なのか美学(エステティック)なのか、ということを考えてつづくと、このなか(図1)に網羅されてしまう。

精神分析は今のところ最善の思考法

この全てを取り扱うことができるというところが、やはり精神分析の特異性なのです。たとえばカントは倫理とか、そういう局所的な局所論。従来の哲学は局所論、各論という風に考えるとよい。そうするとこの総論、つまり全体を俯瞰するような、見渡すような一つの思考法は、やはり今のところ精神分析が最善の方法。ベストとは言わないですよ。最善。精神分析は今のところ最善の思考法である。すなわち、

「精神分析は今のところ最善の思考法である」。

La psychanalyse est une des meilleures méthodes pour le moment.

精神分析を超えるものが出てきてくれれば一番いいのですが、今のところは精神分析が最善の方法。その次は、新しい方法が出て来るといいな、ということでしょうが、それまでは精神分析がこの役割を担っていく必要があるのでしょうね。

だから人のやっていること、営為の真髓とか本質について、きちっと記述できるのは、精神分析以外にない、ということです。「記述できる」ということ、describeできるということです。「感じる」ではない。「感じる」とか「共感」ではない。「記述できる」ということは、シンパシー sympathyとは違う。共感(シンパシー)でやっている人は多いです。シンパシーでやれば全部うまくいくと思っている人もいますね。シンパシーは、人をコントロールする一つのメソッドとしては非常によいですよ。シンパシーを利用すれば、多くの人を動かすことが可能です。

面白いのは、論理(ロジック)で動かされる一群の人たちと、共感(シンパシー)によって、つまりエモーショナル

と、東浩紀さんや北田暁大さんが71年生まれですが、最近では75年生まれの人たちが登場してきているように思います。雨宮処凛さんや中島岳志さん、先ほどの赤木さん(赤木智弘一括弧内引用者)が75年生まれで、世代意識が強いですね。76年生まれで、世代意識が強いのは、76年生まれで、78年生まれで、宇野常寛さんあたりまで含めてもいいでしょう。この世代の人たちが30歳になった2005年前後から、格差や貧困の問題が注目されるようになってきた。そして先ほど述べたように、この世代は戦後三代目でもあり、彼らが30代になった時期は世代交代によって平和の問題が注目されにくくなった時期でもある。」(p25-p26)「ベビーブーマーは年長世代に対する反抗心と、既存のシステムをすべてぶちこわしてしまえという違和感を、全共闘運動というかたちで爆発させました。ロスジェネレーション(就職氷河期世代のこと一括弧内引用者)のそれは、「団塊世代」に対する「既得権」批判と、既存のシステムを破壊する戦争待望や「焼け野原」願望などで表現されていると思います。小泉構造改革支持や、ネット右翼の左翼たたきも、「既成勢力」破壊願望の表れだったかもしれません。」(p29)「ベビーブーマーが豊かな社会に直面したといっても、豊かな社会に即した思想が生まれるのはそのなかで生まれ育った「バブル世代」の登場まで待たなければならなかった。貧困と格差が思想というかたちに結実するには、八〇年代後半から九〇年代生まれの、ゼロ成長があたりまえの時代に生まれ育った人たちが論壇に登場するまでかかるかもしれませんね。」

註3 藤田博史「補 性倒錯のトポロジー—道徳・倫理・献身の位相」、『性倒錯の構造(増補新版)』、青土社、2006年

註4 自動車会社VOLVOのコマーシャルより

図1

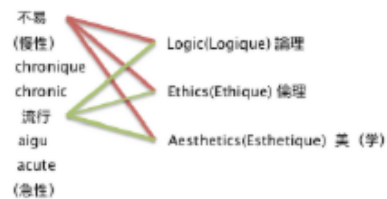


図2

ルなもので動かされる人たちがいて、エモーショナルで動かされる人たちは、論理（ロジック）を排斥する。要するに敬遠する傾向があります。逆にいわゆるインテリゲンチヤ、知識人みたいな人たちは、むしろエモーショナルなものよりも論理（ロジック）なものに訴えかけて引っぱっていく。

――「ロジックもどき」（笑）というのではないですか。

そうですね。émotion logique すなわち「論理的なエモーション」。逆もあるでしょう、logique émotionnelle 「エモーショナルな論理（ロジック）」というものもある。論理を一生懸命組み立てているのだけれども、その動機がえらく感情的なもの。

精神分析はそのどちらも似合わないのです。クールに、よく冷えたアイスクリームみたいにクールに。精神分析を喩えるならば、フランス語でソルベ、つまりシャーベットみたいなもので、冷たいのだけど美味しい。ちょっとメントが利いている。ぐつぐつ煮立ったブイヨンではない。ちょっと冷酷な、というか。

論理・倫理・美学の三位一体

話を戻して、急性か慢性か、つまり流行か不易かということと、この人は何について語っているのだろうか、論理（ロジック）なのか、倫理（エティック）なのか、美学（エステティック）なのか、ということです。人間にとってはどれも欠かすことができないのです。三位一体的なものなのです。論理だけでも駄目だし、倫理だけでも駄目だし、美学だけでも駄目なのです。「三位一体」。

――倫理と美学がどのように違うのか、似ているのか、わかりにくいのですが。

わたしの書いた論文のなかで、『性倒錯の構造』の増補版の加筆した論文(註3) があるのですが、そこに図があります。(図2)

われわれは基本的には、想像的（イマジネール）なものを心の中に抱えていて、その原動力で――つまり想像的な欲望をまず持っているのですが、その欲望が象徴化されて――論理的なものを形成できるわけです。だからわれわれの根本的な論理も、やはり根底には欲望があるわけなのです。だからこの想像的（イマジネール）なものから象徴的（サンボリック）なものに向うベクトル、ここのなかに生じてくるのが論理（ロジック）なのです。

一方、われわれは「語る」のですが、「語る身体」つまりわれわれを身体から切り離すことは不可能です。つまりわれわれは語っているのですが、その「語り」というのは、常にわれわれの身体の方へ戻されていく。ここに「倫理」の領域が発生する。

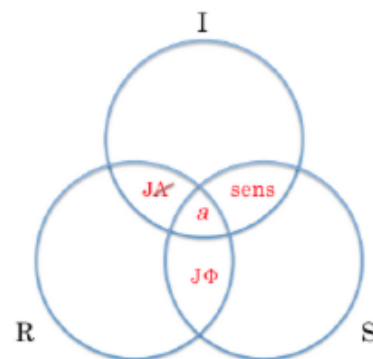
われわれの身体、われわれの「身体的なもの」、「身体自我」とも言いますが、たとえば鏡に映すことで、それが自分で認識されたり、フィジカルなものが具象化する領域なのです。つまり現実的（レエル）なもの、すなわち実際はわれわれが感知することができない領域のものが、想像的（イマジネール）な領域に立ち上がってきた時、そこへ「美」というものが生まれてくる。

ですから、こういうラカンの三つの境域（レジスター）に沿って考えるとすれば、おそらく論理、倫理、美学はこういう関係性を描く（図3）であろうと思います。その真ん中のところに対象 *a* objet petit *a* がくるわけです(図2)。ここがファルス享楽 jouissance phallique(JΦ), 他者の享楽 jouissance de l'autre, ここが意味 sens。(図2)

そうすると何かというと、論理（ロジック）は意味の領域に立ち上がる。倫理（エティック）は、実は男性的な享楽の領域に立ち上がってくる。だから倫理はどこかしら男性的なもの。美学は、他者の享楽の領域。それが美学。そういう根底にあるジュイサンス（享楽）、あるいはサンス（意味）の領域に、これらの三つの部分が立ち上がってくるということを押さえておくことが重要なのです。

思考の螺旋運動

だから美学は、純粋に論理（ロジック）ではタッチできないところで動いているということです。だから美学に到達するためには、これ（図3）は時計方向にしか回らないので、倫理を経由しないと、美学へと到達できないのです。これを文学でやろうとしたのが三島由紀夫。三島由紀夫はそういう倫理性、たとえば仏教的な倫理性とかそういうものを通じて、最後に、身体的なものを、想像的なもののなかに解消してしまった。つまり自分がそこで死ぬ、と

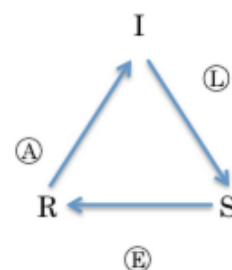


I = 想像界（イマジネール）

R = 現実界（レエル）

S = 象徴界（サンボリック）

図3



いうことを、最高の美だと決定づけてしまった可能性はあります。ただそれもグッと押し進めれば、また論理（ロジック）に戻ってくるのですけれどね。だから一生のうちに、これをぐるぐるぐるぐる何回転もしている人もいるだろうし、実際、そうしなければいけないし、人間の思想はそうやって鍛錬されていくのです。

ももとの出発点は、われわれ身体的存在として生まれてきているので、ここ（図3のR）から出発している。こう出発して（一周して）こう戻る。そうすると次の段階に入る。こうやってどんどん螺旋状に上がっていく。で、最後に死。死とは何か、というときまたここ（図3のR）に戻って来ます。手裏剣を投げているみたいです（笑）。

この螺旋運動を上へ上げていくためには、全てに対しての感性を磨いておかないと、螺旋運動が回らない。一周すらできないのです。論理（ロジック）一辺倒でも駄目だし、倫理一辺倒でも駄目だし、美学一辺倒でも駄目。この三つがうまく歯車のように重なって螺旋運動を行なっていくなかで、きっとわれわれは総合的な意味での、一つの人間の叡智というか、知性に少しでも近づくことができるのだと思うのです。どれが欠落しても駄目なのです。

われわれの最大の防御は知性

――「美学」というものが、まだもうひとつよくわからないのですが。

「美」というものは、基本的に自然のなかに宿っているのです。DNAの配列とか、鉱物の結晶とか、マンデルブロ一曲線とか。そういうものをわれわれは発見する。傲慢な人たちは、自分たちが美をつくり出していると思っているけれども、既に自然のなかにあるものを再発見している。それが美なのです。

絵画を見てもそうですよ。ピカソの絵を見て、ピカソの絵を見て美しいと感じる人は意外と少ないのかもしれませんが、たとえばシャガールの絵を見たとき、あるいは好きな絵を見たときに、そこに美を感じるというのは、おそらくその美のルーツを辿ってみると、自然の現象のなかに準備されているものなのです。そういう意味で、想像的（イマジネール）な領域というのは、感覚化される。つまり純粋に身体的な領域というのは見ることも触ることも嗅ぐこともできないわけです。それが、われわれが見たり聞いたり嗅いだり、それと知ることができるのは、こういう想像的（イマジネール）な領域に、それがインプットされてくるからなのです。

そのときに、はじめてわれわれは、形状とか色とかその組み合わせとか、相互関係とかを目の当たりにする。それが美の基本なのです。美の基本というのは、要するに、現実的（レエル）な領域、自然の領域に、あらかじめ準備されているものなのです。そのことを知らないと、美術家も、軽い美術家と重い美術家とに分かれてくる。

ものすごい抽象を描く人もいれば、ものすごい写実を描く人もいます。写実というものは、ある意味、現実のなかに準備されている美を、突き詰めようとする一つの形なのだと思います。まったくそのまま写し取っても、それは美ではない。それは現実のなかに、あらかじめ用意されている。それが想像的（イマジネール）な領域に立ち上がって、はじめてそれと知られるということは、ももとはそうではない、ということです。ももとの形や色は、われわれは永遠に知ることができない。つまり翻訳された形でしか、われわれは美というものに触ることができない。interpretationですよ、要は。何によってか。想像的なものによって、翻訳 interpretationされたものです。だから美術をやっている人がそこに気付いているかそうでないかで、全然違う。あらかじめ美の原点は、現実界に用意されていて、それがわれわれの想像界のなかで蓄積され、そしてそれが、象徴的なものを通して具現化されているのが、おそらく美術といわれている人間のアートの在り方なのでしょう。

――やはり美術は、自然に一回戻っていく必要があるということでしょうか。

藤田：しかし、そこでいう自然は、われわれのいう自然ではないですよ。不可視なもの、アンタッチャブル（不可触）なものなのです。そこが、何らかの作用を通して、われわれの想像的なものの中に入り込んできて、とりあえず具現化しているものなのです。

そこで、以前から話している量子力学的な話と繋がってくるわけです。つまり、観測者であるわれわれが、あるアンタッチャブルな不可視なものを、可視なものに変えた瞬間というのは、これは観測問題でしょう。ということは、美というものも、美の立ち顕われ方というのも、観測問題の一つなのです。

それを、対象の属性として考えてしまったらいけないわけです。われわれの観測様式によって、色とか形とかが決まってくるわけですから。それを、対象物に備わっている性質として、考えてしまう大きな誤謬が、クオリアという考え方でしょう。クオリアは、対象の属性だとしてしまっている。そうではない。色とか形というものは、われわれの側の都合なのですから。

――そのためにも、対象というものを、論理（ロジック）として、一回わかっていないといけない・・・。

藤田：だから、われわれにとってのターミナル基地——バスターミナルってあるでしょう——ターミナルはやはり論理（ロジック）なのです。われわれが、常に出掛けて行って戻って来るターミナル駅は、ロジックな場所ではないと駄目なのです。それがレエル（現実的）な場所やイメージナル（想像的）な場所をターミナルにしまうと、宗教だとか、あるいは過激派とか、実践を中心とするようなものになるわけです。

「われわれの最大の防御は知性です」（註4）ということです。

PAGE TOP 

[目次へ戻る](#)

Copyright 2011 EURLCLINIQUE Division Culturelle. All Rights Reserved.